

教員活動状況報告書

提出日：令和 4 年 2 月 28 日
 所 属：獣医 学部 動物応用科 学科
 氏 名： 戸張靖子 職位： 講師
 役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。（分量の目安：2～5 行（80 字～200 字）（科目表以外））

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

人を育てる」という仕事に責任と誇りを持ち、社会人、職業人として必要な知識や技術の習得を目指して麻布大学に入学された学生さんがそのモチベーションを落とさないような専門基礎的な教育科目の授業とそれに関連した実習を行う。また講義・実習内では学生さんが自分の成長を実感できるような働きかけを行う。具体的には、学部 1 年生に対しては、教養を深め、学部教育の基礎となる学力を授け、2 年次から 3 年次にかけては専門教育を受けるための基礎となる専門基礎の科目の知識を授ける。卒業研究においては、問題解決能力も育めるよう指導を行っている。またジェネプロにも参画、やる気のある学生の学習意欲をより高める活動をおこなう。本年度は第 4 年次のクラスを担当し、コロナ禍において修学に困難をきたしている学生やそのご父兄への面談を行った。

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
動物生化学	動物応用科学科	必修	2	143 人
動物生化学実習	動物応用科学科	必修	2	143 人
生物学実験	動物応用科学科	必修	1	143 人
動物応用科学概論	動物応用科学科	必修	1	143 人
バイオインフォマテ ィックス演習	動物応用科学科	選択	3	24 人
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	2 人
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	1 人
遺伝生命科学実習	動物応用科学科	選択	3	40 人
卒業研究指導	動物応用科学科	必修	4	4
基礎ゼミ	動物応用科学科	必修	1	8 人× 4

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか，自らの信念，価値，目指すもの）（分量の目安：8～12行（320字～480字））

インプットとアウトプットの多い、自分で考え判断できる人材となってほしい

麻布大学での学問を通して自身のブランディングをしてほしい

動物生化学の講義では、毎回講義の内容で課題を出し、その回答を次の講義前までに学理に提出してもらっている。その際にその回答の採点は行わない。学生が提出した回答をもとに私は解答案を作成し次回の授業冒頭で課題の解説を行う。学生は自分が提出した課題回答と解説を見比べることで、自身の知識の定着を確認することができる。これらは、学生が目的意識をもって学ぶ態度を身に着ける効果があると信じている。

また、動物生化学と動物生化学実習の間につながりをもたせた内容設定を行っている。これは座学と実習の両面から学ぶことで、知識の定着を促すものである。また点として学ぶのではなく線や面で学ぶことを知るきっかけになることを意図している。

基礎ゼミや動物生化学実習などで提出するレポートについて、レポートはどのような構成でかかれるものなのか最初に書き方の見本を提示しやテンプレート作成する課題を出して、早い段階で身に付けてもらっている。発信力（アウトプット）の基礎である、文章力を身に付けてもらうのが狙いである。レポート作成の参考文献については、論文もしくは書籍の引用のみに限定しており、それは良質なインプットの機会を増やす目的で行っている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

学生の発信力を高めるという目的で、実習やゼミ・卒業研究指導の過程においては学生の発表する機会をつくる、または多くするという方針をとっている。ただし、動物応用科学科の学生は全体的に口頭によるプレゼンテーション力がとても高く、文章力に大きくばらつきがあるように感じている。よって研究室に配属された学生に対しては、研究室ミーティングにおける口頭のみでの週間報告、文章による月間報告、プレゼンテーションソフトを用いた2カ月間の研究進捗報告を課して、個人の能力を把握するように努めている。

またゼミや研究室のプログレスレポートでは、教員を含めて一人一回必ず質問制度をつくることで、質問をすることに対する心理的なハードルを下げる効果を狙っている。さらに、研究室内の発表会だけではなく、古泉賞発表会（学科）、研究三昧（大学）、動物学会関東支部会などで発表することを促しており、学部生ながら動物学会関東支部会で発表する学生も輩出している。

インプットに関しては、研究室活動で毎年2冊程度教科書や学術書を輪読することにし

ている。(この活動で、分厚い本を読み切ったという達成感が学生の自信につながると聞いた。) また研究室活動にビジネスチャット(slack や asana)を取り入れているが、そこに学習に関わる論文、書籍、ネット記事等リンクを貼っておくと、学生が高確率でアクセスしてくれるので、推薦図書の間として利用している。

学生の教員に向かっての自主的なアウトプットは、こちらがフィードバックを適切に返さないとみられないことが多いので、学生が発信してきたものすべてにおいて何らかのフィードバックを瞬時に行うようにしている。

アクティブラーニングについての取組

動物生化学での事前課題学習や講義内での演習

動物生化学実習でのグループディスカッションやその発表会

生物学実習での事前学習(スライドや動画の視聴)

基礎ゼミでのスライド作成、スライド発表と学生同士の質疑応答

ICT の教育への活用

授業資料を 1 週間前までに学理にアップロードし、講義前から学生に閲覧できるようにした。

MEET で行った授業を録画しそれを学理にアップロード。欠席した学生や授業内容を復習したい学生がオンデマンドで利用できるようにした。

動物応用科学概論における学生提出レポートに対して、提出された順に学理上でコメントをつけた。

ビジネスチャット slack や asana を使って、学生相互で進捗状況を把握することで学生教員感だけではなく、同学年間、先輩後輩間でのコミュニケーションが増加した

4. 教育方法の改善の取組(授業改善の活動)(分量の目安: 15~24 行(600 字~960 字))

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

(①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください)

① 教育(授業, 実習)の創意工夫(A)

今年度も、新型コロナウイルスに関する話題を随所に取り入れた。たとえば動物生化学では、生体分子を学ぶ際に、ウイルスを構成しているのはどんな物質とか、それは私たちを構成する細胞とはどう違うのか、どうして石鹸で手を洗うと感染予防になるのかなど。

また前期の専門ゼミでは、コロナウイルスワクチンに関して各社の特徴、作り方をまた日本製のワクチンの可能性等を調べて発表する機会をつくり、正しい情報へのアクセスの仕方、また正しい情報に基づいた自分の意見の発表の仕方を身につける機会をつくった。

② 学生の理解度の把握 (A)

動物生化学やバイオインフォマティクスでは毎回提出してもらう課題レポートで理解度を把握した。また提出物をみながら、どこで学生がつまづいているのかを理解し、解答案をより詳しくしたり、不必要なところは削ったりした。

③ 学生の自学自習を促すための工夫 (A)

基礎ゼミでは、学生はテーマに沿ってレポートを作成する提出されたレポートにコメントをすることによって、そのコメントに対応する形でさらに調べ物をして、それを反映させたプレゼンテーションを行ってくれた。そのプレゼンテーションに対して、学生間で質疑応答する機会をつくった。学生間の質疑応答に答えられたまたは答えられなかった経験は、学生自身の自学自習が十分であったかどうかを反省する良い機会になったと考える。

④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (A)

MEET、メール、ビジネスチャット、対面等学生の好きなツールで質問してもらった。全体的にメールでの質問が多かった。

④ 双方向授業への工夫 (B)

ゼミや演習、実習などでは双方向というかむしろ学生さんメインで発信する授業内容が組めた。専門基礎の座学(履修者140名以上)の場合は、講義の最初に日々の日常について私が感じた疑問について最終的にその疑問が生体内物質の動態を明らかにすることで解明できるかどうかという視点の小話を導入することによって、その小話についての質問が講義の導入部に生まれ、それに付随する形で講義内容の質問が複数の学生さんからチャットで寄せられるようになった。最近、匿名性を高めた質問アプリを使うと講義中に学生さんからの質問が増加すると聞いたので来年度に導入して、双方向への工夫をより行いたいと考えている。

※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)

⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

5. 学生授業評価 (分量の目安: 4~7行 (160字~280字))

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

昨年の前期オンデマンド授業のときに頂いた評価で、一番厳しかったものは生化学の講義

スライドにつけた私の音声による説明が、抑揚がなくつまらないというものだった。昨年後期からは、大学のネット環境がよりよいものになったことに伴い、オンライン講義の形にし、可能な限り教員の顔出しを行い、導入部に学生に身近な話題を入れるなど、対面授業感を高めた。また、講義のプレゼンテーションを MEET の録画機能で録画したものを授業後可能な限り早く学理にアップロードし、オンライン講義に欠席した、もしくは、復習に使いたい学生さんに利用してもらった。

バイオインフォマティクス演習では、昨年は講義を先に録画してその録画したものを学理にアップロードして、それを見ながら演習を行ってもらう形にしていたが、分担されている先生と授業の進め方の違いへの戸惑いや画面が小さくて何をしているのかわからないとのコメントがいくつかあったので、今年は事前に配布する作業手順は PDF で配布し、オンラインでその資料に沿って説明し、その講義も録画して講義後学理にアップロードした。

② ①の結果はどうでしたか。

今年度の前期の動物生化学の授業評価では「戸張先生も落合先生もお話が面白くて楽しく授業を受けることができました」「お二方とも、分かりやすい説明と配信で、とても面白かったです。」とコメントいただいたので、話し方を変えた効果があらわれたようである。

今年度のバイオインフォマティクス演習では、昨年度のようなコメントはなかった。しかしながら、一度出張のため補講をオンデマンド形式で行ったところ、その回の内容がわからなかったというコメントが数個寄せられた。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

生化学では、今年度も授業導入のための小話を準備するのと、講義をするときに楽しそうに話すのが大事かと思いました。

バイオインフォマティクスは、可能な限り対面またはオンラインで参加してもらって、わからないことはその場で質問してもらえようにするのが大事だと思った。

6.学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。）

動物生化学では、講義の内容の特に理解してもらいたいところを課題に出し、それを次の授業前までに回答を学理で提出してもらっている（それに対して評価はしない）。学生から提出された回答をもとに、次の授業の冒頭に課題の解説を行っている。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価 本年度、前期の授業評価からの抜粋

・資料が簡潔で見やすく、毎授業課題の解説があったおかげで、より理解を深めることができました。

・質問にも丁寧に答えて頂き、授業に取り付きやすいと感じました。

・前回の課題についての解説を丁寧に話して下さったので、わかりやすかったです。

・メールで質問した際に、迅速に対応して下さりありがたかった。

・質問などに詳しく答えていただいて嬉しかったし、よりこの分野に興味を持つことができました。

・課題の内容や量が適切だった。(7/15)

・1つ1つ丁寧に分かりやすく解説して下さったので、理解が深まりました。また、毎週の課題では講義で学んだことを踏まえたものだったため、復習としても活用できました。

・図や表が配布資料に乗っていたため、授業内容が理解しやすかったこと。

・毎回、授業後に課題が出るのでそのおかげで授業の復習が出来て良かったです。

・スライド内の図を丁寧に説明して下さっていたのが良かったです。

・今まで習ってきたことを踏まえつつ新しいことも含まれていて、とっつきにくい感じはなかったためある程度は理解できたと思った。

あまり生化学自体は得意ではないが、課題として自分で調べる機会が多かったことで少し興味を持つことが出来たと思う

・他の講義(分子生物学や昨年度の有機化学など)で学んだことと関連付けながら、より深く理解し、学習することができました。ありがとうございました。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況) (分量の目安: 1~2 行 (40 字~80 字))

「グッドティーチング 賞受賞者から学ぶ“授業の工夫”」や教育改善プログラム成果報告会「教員相互の授業参観」など FD 研究会に定期的に参加した。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。(分量の目安: 3~6 行 (120 字~240 字))

准教授への昇進と大学院生指導実績をえる: 大学院生と一緒に教育研究することにより、麻布大学でしかできない研究を推進する。その結果、大学院生が国際学会や国際雑誌での発表などで学生のオリジナリティをアウトプットすることにつながると考える。

「ウズラを通して、生態、形態、動物福祉、文化、ヒトとの関係、家禽化(実験動物化、産業動物化を含む)を学ぶ」という内容を本年度、生物学実習で挑戦させてもらった。このような内容は他の動物科学系の大学でも行われない内容で、一年生の授業評価でも好意的

であった。今後も麻布大学でしか学べないオリジナルな授業を展開したい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

シラバス、授業資料、授業評価、ジェネプロ HP、

●FD 研修事後課題（ピアレビューによるブラッシュアップ）の実施

有・無

該当を○で囲む

●下線部以外は今回新規追加した事項を示す。